

第23回江戸川乱歩賞受賞作

# 透明な季節



## 梶 龍雄



第23回江戸川乱歩賞受賞作

# 透明な季節



## 梶龍雄



透明な季節

定価 八八〇円

第1刷発行 昭和52年9月6日

著者 梶 龍雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社



〒112 東京都文京区音羽2-12-21  
電話 東京(03)945-1111 (大代表)  
振替 東京8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたしません。

© 1977 TATSUO KAJI Printed in Japan

## 目次

|                         |          |     |
|-------------------------|----------|-----|
| 第一章                     | ポケゴリが死んだ | 5   |
| 第二章                     | 薫を知った    | 83  |
| 第三章                     | 工場に来た    | 161 |
| 第四章                     | 堀が死んだ    | 202 |
| 第五章                     | 空があった    | 242 |
| 第六章                     | すべては燃えた  | 261 |
| 終章                      | 蝶は消えた    | 289 |
| 江戸川乱歩賞の沿革及び<br>本年度の選考経過 |          | 294 |

装帧／井上正篤  
カバー写真／山田真人

透  
明  
な  
季  
節



## 第一章 ポケゴリが死んだ

### 1

ポケゴリが死んだ。しかも殺されたのだ。

「額のところに、ドベツと血が流れててよ、泥がくっついてんだ。まっつあおな顔でさ、あおむけになってたけど、まだ目をつむってたから、少しは助かったけどよ……」

古屋のこの描写は、高志たちを戦慄させた。

だが同時に、誰でもが身内からこみあげてくる、ぞくぞくした喜びに近いものも感じていた。ポケゴリをにくんでいない者は、この学校に一人もいないにちがいないからだ。

授業開始前の朝の校庭である。

陽射しの暖かさがまだありがたい三月の初めの頃だ。だからほとんどの生徒が、北端に長く伸びる板塀に背をよりかからせてだべっている。古屋の話はここで披露された。

話はたちまちに、伝播されたらしい。さっきまで校舎の入口で、担任教師と立話をしていた四



年一組の級長の堀や、五年の剣道部の部長の佐伯といった上級生も、古屋のまわりに歩み寄った。小さな人の輪ができた。

「でも、よくそんなそばまで行けたな？」

誰かがいった。

「行けたもなんも、ポケゴリかどうか見てくれって、おまわりにいわれちゃったんだから、かなわねえよ……」

古屋はポケゴリの死体を自分だけが見たことが、少なからず得意そうであった。だが思い出すと、恐怖と嫌悪に包まれるらしく、やはり顔がこわばっている。それでも虚勢をはって、陽気そうにその時のことを説明し始めた……。

顕文館中学の生徒の中には、根津権現神社の境内を横切って登校して来る者がかなりいる。谷中や八重垣町、藍染町方面から、不忍通りを突っ切って来るのだ。社の表門から入って、本殿の西側を、池づたいに出ると、裏門坂が左にむかってあがっている。学校はその坂をあがって、少し行った所にある。

ところがその日の朝は、その生徒たちは、社の表口の門で、巡査に立ちはだかれてしまった。不忍通りにもどって、市電の千駄木町の停留所の方から、裏門坂をのぼって行けといわれたのだ。

裏門坂は、根津神社の裏門が開く所にあるのでこの名がある。だが、そのあたりの人びとや、高志たち顕文館の生徒は、「医専の坂」といっている。坂の中途に日本医専があるからだ。

生徒たちは何が起こったかわからないままにそのとおりにした。もっとも裏門坂をあがれば、左手が根津神社だ。そこから見れば何かの事件があったことは、すぐにわかった。さほど離れて

いない池のあたりで、何人もの巡査の姿が、黒い塊<sup>かたまり</sup>りを作っているのが見えたからだ。何かの犯罪のように思われた。

道と境内との境に、近くの住民が何人か集まって、池の方を見ていた。そのそばを通りかかった生徒のうち、事件が人殺しであるというささやきを、小耳にはさんだ者もいた。

裏門坂をはさんで、神社とむきあっている千駄木町に住んでいる生徒たちも、いく人かいた。彼等は噂話ではあったが、それ以上の情報も聞いて登校して来たらしい。

それ等のさまざまな情報が綴<sup>つづ</sup>り合わされて、根津神社で起こったのは人殺しで、しかも殺されたのは、あろうことかポケゴリであるということは、ほぼ確定的になっていた。

生徒のほとんどみんなが、この噂話をしているらしかった。そういえば、校庭にいつものような活発な動きはない。たいていの者が、それぞれに校庭のあちこちの隅にたたずんでしゃべり合っている。ただ彼等の持っている情報は、多分に不確実なものにちがいがなかった。

だから、事件現場を通り、しかもポケゴリの死体をその目で目撃した古屋ほど、確実に迫力のある情報を持っている者はいなかった。

古屋がなぜ、根津神社の表門から入らず、東側の民家の狭い通路から、壊れた塀の間を抜けて、いきなり境内に入ったか、彼自身、説明はしなかった。クラスで一番の軟派の不良である。彼の言動には、いつもひと味ちがった屈折がある。まともな行動は、彼にとつて恥らしい。ひょっとしたらそのあたりに、彼のよくいう「美しい女<sup>メ</sup>」でもいるのかも知れなかった。ともかく、彼は登校の途中、しばしばそのコースを使うらしかった。その日もそうだった。そして彼は、巡査の警戒にとりかこまれた現場の中に、ひょっこりと歩みこんでしまったのだ。

現場を調べていた巡査や刑事は、初めはちょっと驚いたことだろう。しかしおおよその推察は

ついたらしい。古屋を呼び停めて、被害者は顯文館中学のポケゴリかどうか見てくれといったそうだ。

「……小使いの爺さんがいたんだけどさ、あのしょぼくれのことじゃ、あてになんない思ったんじゃないかな……」

古屋はその理由をそう説明してからいった。

「……いやな気持だったけど、しようがないやね。刑事のやつ、おれをおどかしたいみたいに、パツとむしろを持ちあげやがんの。初め見た瞬間、おれ、人間みたいに見えなかったよ。なんてえんだい……人形みたいだよ。ほら、博覧会のパノラマなんかによくいる人形みたいのさ。まっさおで、コチコチで……。でも、ポケゴリだったよ。ポケゴリのコチコチ人形さ……」

高志は笑った。高志のまわりの者も笑った。しかしその笑いの合唱は、何とも陽気さのない、低く沈み込むようなものだった。

高志は体の底からわきおこるような、正体不明の身震いを感じた。それは一種の興奮のようにもあった。高志はつばをのみこみ、その興奮をおさえてからいった。

「頭かどこかなぐられて殺されたのかい？」

「さあ、そいつはわかんないけどさ、額のとこ……ええと、こうして上から見ただから、右の目の上んとこの額あたりが、血でドパツとしててよ……血って、ああなるのかな。ドス黒くて、ぜんぜん赤くないんだ……」

古屋のまわりは、いつの間にか、黒山の人だかりになっていた。

しかしその誰もが、しばらくは口をきかなかった。古屋のリアルで、微細な描写に、息をのんでいる感じだった。

その時、とりかこむ生徒の群の中から、誰かの声があった。

「だけど、殺した奴は偉いよな」

みんながひそかに思っていたことが、ようやく公おおやけにされたのだ。勇敢な言葉なのだ。生徒の群がどよめいた。賛同の反応と考えてよかった。だがしかし、それに続いて発言する者はいなかった。

ポケゴリの恐ろしさは、死んだとわかった今でも、頤文館中学校の生徒を呪縛じゆばくしていたのだ。

## 2

ポケゴリこと諸田少尉が、頤文館中学の配属将校として現われたのは、前年の五月のことである。

それまで……先任の配属将校が一昨年の十一月にやめてからそれまで……生徒たちは少なからず解放された気分を味わっていた。地上の何よりも教練を嫌う高志などは、天国だと思った。

配属将校は、どの学校でも、生徒に対して……いや、教師に対してさえ、絶大な権力を持っていた。

彼等にならまれたというだけで、その生徒は、極悪人の烙印ろういんを押されたようなものである。しかも彼等は担当の「教練」ばかりではなく、「操行」といった課目にも絶大な発言権を持っていた。

他の学課得点の優秀な者も、この二課目で、加虐愛的と思われるほどの低い点をもらえば、全体の平均点で、目もあてられない結果になる。

ましてや陸軍予科士官学校や海軍兵学校といった軍人エリートを目指する者にとっては、教練

や操行の点が悪いということは、決定的にその道を閉ざされたようなものだった。

だから生徒たちは、配属将校に畏服し、大和魂にあふれた未来の軍人の卵として、大いに励まざるをえなかった。

その上、顕文館中学は、もともと軍国的だった。講堂や職員室などに貼り出された校風標語も「質実剛健」である。

あるいはその校風が、歴代ごつい配属将校を呼ぶようになったのかも知れない。それともそういった配属将校が、そのような校風を作りあげたのか……。そのへんことはわからない。

ともかくも高志が入学して、三年生の今になるまで、三人の配属将校があらわれたが、そのどれもが剛直な軍人精神にあふれていた。

だから顕文館中学の生徒の学力の方は、まことに芳しくかんばなかったが、武道と軍事教練の査閲では、群を抜いていた。年に一度、軍事教練の成果が、練兵場でデモンストレートされる。それをどこから現われた、大佐とか中佐とかいう偉そうな軍人が検分して、講評をくだすのが査閲である。講評は優、良、可、不可などで、その上に「おおむね」という言葉がつくこともあった。顕文館中学は、いつも「優」か「おおむね優」で、まちがっても「良」になることはなかった。最近の査閲では、感激した査閲官は、「大いに優」と講評をくだしたものである。

その顕文館中学に、配属将校のいない五ヵ月というエアポケットが生じたのだから、珍しいことである。

もちろんその間も、軍事教練は続けられた。万年伍長と仇名される糸井教官が、一人で指導にあたっていたのだ。四十過ぎの退役軍人である。よく見ると、心持ちびっこをひいている。そのため、もはや現役軍人としてお呼びがないのだというのが、生徒の噂だった。

どこか世捨<sup>よすてびと</sup>人的な淋しさを、その瘦身に漂<sup>ひ</sup>わせている。型通りの教練をやるだけで、自分の仕事に一片の情熱も感じていないようである。彼が軍服を脱ぎ、私服で校門を出る時は、よく見るうらぶれ中学教師のそれと、何等かわらなかつた。

高志たちはこの万年伍長の指導の下で、かなりだれた教練をすごし始めた。分列行進のさいちゅうに卑猥<sup>ひわい</sup>な冗談をとばして、リズムを狂わせようとする者が現われた。巧みに列から脱け出して、柔道場と塀とのわずかな隙間<sup>すまひ</sup>に姿をもぐりこませてサボる者もいた。むちで馴<sup>な</sup>らされた虎の見える芸は、怯<sup>おそ</sup>えの象形にすぎないのだ。

次の配属<sup>はいじく</sup>将校がきまらないのは、どうやら軍人不足のためであるらしいことは、高志にもそれとなくわかつていた。戦局はかなり押し迫<sup>おし</sup>って来<sup>き</sup>ていたのだ。アツツ島が陥落<sup>かんらく</sup>し、中学生の高志が初めて聞く「玉碎<sup>たまさい</sup>」という言葉が、しばしば使<sup>つか</sup>われるようになっていた。

その「玉碎<sup>たまさい</sup>」という言葉も、実際は背筋の寒くなるような、むごたらしいものであることも、高志は知<sup>し</sup>つた。

玉碎者の中には、歩兵銃で自殺する者も多かった。だが銃身は長い。銃口を急所にあてても、引き金まで手がのびない。そこで兵たちは片足の靴下をぬぎ、足の親指で引き金を押して自殺した。そんな話も、影の情報として聞かされた。

内地の情勢も、しだいに押し迫<sup>おし</sup>りつつあった。

防空演習がしばしばおこなわれ、高志は自分の家の庭に防空壕<sup>ぼうくわう</sup>を掘<sup>ほ</sup>った。窓にはいつも黒いカーテンがたられされる用意がされた。電球の笠は、風呂敷で頬かむりをさせられた。光が外にもれ出<sup>で</sup>ないためである。

町の商店街は、ひっそりとなった。多くの店が戸をおろしたり、薄汚れたカーテンをひいたり

して、營業をやめてしまった。主人や店員は、徴用ちようようになって、工場に狩り出されてしまったからだ。

大学生たちは、すべて勉強をやめて軍人になり、戦地にむかうことになっているとも聞いた。ともかく南京が陥落し、旗行列で町を練り歩いた小学生時代は、もう夢のようであった。

そんな情勢では、前線に一人でも多くの軍人が必要だったにちがいない。中学の軍事教練の教官などに、軍人をまわす余裕などなかったのだ。

だが、顕文館中学生徒の春眠を破って、その配属将校が来たのである。

もともとそれは、突然というほど急ではなかった。それより、二、三週間前から、すでにそういう噂は流れていたのである。

いったいどこからそんな情報が流れでくるのか、ふしぎだった。

多様な家庭の子弟が、連日集まり合う学校という形態は、案外、豊富な情報が、交換されているのかも知れない。しかも大人でない人間の、なまの思考と語り口で伝えられるだけに、かなり暴露的に……。

その情報には、不吉な影が漂っていた。その配属将校は、前線任務に問題があるために、内地任務にされて、顕文館に来るというのだ。

それを高志に伝えた友人も、又聞きを重ねるだけ重ねた末の伝達だったから、「前線任務に問題がある」という意味が何であるかを知らなかった。だが、そのいいまわしは、中学生の語法を越えていた。だから、そこだけが大元の情報に忠実で、真実を伝えているように、高志には感じられた。

高志は「問題がある」という意味を考えた。だがすぐやめた。考えても、来る者は来るのだ。

それに軍隊で「問題がある」といわれることは、ともかくもあまり軍人らしくないということにもなる。だからこそ、この時局に、内地勤務にまわされたのではないか……。

そしてその配属将校が来た。

その朝、いつものように朝礼台に立ったロバと仇名される副校長は、新配属将校の紹介を始めた。

頤文館中学の校長は、名目上だけで、学校に姿を見せたことはなかった。老齢で体が不自由だからということだった。校長室のドアはいつも閉ざされ、正門玄関脇の植込にむかう窓にも、カーテンが一年中引かれていた。

だから実質上の校長は、ロバであった。校長の孫娘の<sup>ひだり</sup>婢であるという。骨ばった長い顔で、瘦身である。気弱な感じで、話し方も控え目である。

「今度、長い間欠員になっていた当校の配属将校に、新しい教官が来られることになった……」極く形式的な、新教官の履歴も人物にもまったくふれない紹介が終りにさしかかった時、講堂兼剣道場の建物と、コンクリート作りの新校舎の間の道から、軍服姿が歩み出て来た。それはちゃんと出場を計算した上での出現のように思えた。としたら、おそろしく計算ミスだった。彼は出場を作るような姿ではなかったのだ。

背が低い。一メートル五〇あるかないかだった。しかし横幅はおそろしくある。胸の四角な広さがそう見えさせるのだ。短かい足は多分に<sup>つ</sup>彎脚だった。

それなりにくふうはしているのだろうが、そのために長いサーベルが今にも地面につかんばかりである。数歩ごとに騒がしい音をたて、柄<sup>つか</sup>の先が斜め向こうに飛びあがる。

陽焼けした茶色の顔で、眉が太く、鼻が肥えている。完全な斜視だった。その目で斜めに朝礼



台に歩み寄る彼の姿は、滑稽こっけいのようでいて、いさかぶきみのようでもあった。整列している生徒たちの方を見ながら歩いていようでもあり、そうでもないように見えたからだ。しかしその時は、高志をはじめ他の生徒たちは、滑稽を感じこそすれ、ぶきみさはあまり感じなかった。

新配属将校は小さな上半身を極端に直立させ、あらぬ方向を見ながら、がに股のよれた足どりで、朝礼台の下にたどりついた。七、八段ある木の階段は傾斜が急であった。サーベルを階段に賑にぎやかにぶつけながら、小兵こひょうの姿を朝礼台上に持ち運ぶその姿は、駅の階段をあがる老婆のそれであった。軍人の尊大さと、肉体の滑稽さが、短かい時間に交錯し、そのチグハグさがおかしい。

彼は今、その尊大さの誇示の時間に入った。壇上に立った彼は、サーベルの柄つかよりやや下に手をそえてもに軽く押しつけ、きびしく体を直立させて、生徒たちと対面した。そのやぶにらみの目が、何とも中途半端ではあったが……。

「カシラ、ナカッ！」

最上級生の五年一組の級長布田のかける声に、生徒たちは顔をめぐらせて、新任配属将校の方を注目した。

彼はそれにこたえ、手をあげて敬礼した。敬礼のしかたで、その軍人が、軍人として何を主張しようとしているか、およそ判断できるくらいの知識を、高志は身につけていた。いやな敬礼だった。軍人の傲慢ごうまんさを主張するものだったからだ。斜め前上にゆっくりと手をあげた。それからまるでまぶしい陽の光を遮さかるように、半ば丸めたままの手の甲を額の前に浮かせた。下にもどって行く手の動きもゆっくりしていた。

「諸田少尉である……」